

# 名古屋・堀川の再生

## ～規制緩和＋市民の熱意で水辺都市再生へ～

NO.2 2005.3.31

河川空間を活用して、まさに新たな活気を生み出そうという試みが広がっている。昨年3月には河川占用許可準則の特例措置が通達され(国土交通省)、同3月に広島市京橋川と大阪道頓堀川が、そして今年1月に全国3番目として名古屋堀川が指定を受けこの3月に水辺のオープンカフェが実現した。

名古屋堀川では「愛・地球博」開催にあわせ、ハード・ソフト両面から様々な施策が官・民共同のもと急ピッチで進められている。

### これまでの経緯

従来から川は「万人の自由使用」が原則。特定の者が「排他独占的に」かつ「営利目的で」河川区域を恒常的に占有することは制限されてきた。

一方で、都市の賑わいの創出や水辺に親しむ空間づくりという観点から、河川区域において従来は許可されていなかったオープンカフェなどの商業施設を自由に整備したいというニーズも高まってきた。

都市再生本部では都市再生プロジェクトとして、「水都大阪の再生」(平成13年12月)、「水の都の再生～広島～」(平成14年7月)を決定し、関係省庁や地元関係者等によって、遊歩道や河岸緑地をオープンカフェや船上レストランなど民間の自由な取組みに積極的に解放できるよう検討が行われてきた。

こうした経緯を経て、平成16年3月、国土交通省により「河川敷地占用許可準則の特例措置」が通達され、地方の提案のもと、

河川局長の指定があればオープンカフェ等一定の施設を設置することが可能となった。

早速同3月に広島の京橋川と大阪道頓堀川が指定を受け、広島では7月に特例措置第1号として2店舗が開店し(写真1)、さらに下流の第2地区で出店の準備が行われている。道頓堀川では12月に戎橋付近の護岸前面に遊歩道「とんぼりウォーク」が完成し(写真2)、現在店舗設置に向けて協議会が準備を進めている。

### 名古屋堀川の歴史

名古屋堀川は、名古屋城築城と同じ1610年、当時海に面していた熱田から城へ物資を運ぶために掘られた、現在は延長約16kmの歴史ある人工河川である。2010年には開削400年を迎え、名実ともに名古屋のシンボリックな川となっている。

その堀川も、高度成長期には都市内河川の例に違わず水質悪化が進み、昭和40年ごろはBODが50を超え悪臭、ゴミなど環境

写真1 広島市京橋川のオープンカフェ



写真2 大阪道頓堀川「とんぼりウォーク」



悪化により市民が背を向ける川となっていた。しかしその後の排水規制、下水道整備、さらには「清流ルネッサンスⅡ」等によるヘドロしゅんせつ、合流式下水道の改善、庄内川からの導水など集中的対策により現在は BOD6 程度と大幅に改善が進んだ。

水質改善が進むと同時に市民の堀川に対する意識も変わり、昭和 63 年国の「マイタウン・マイリバー整備事業」の第 1 号河川に指定された後、県と市の共同の下、沿川の市街地整備と一体となった魅力ある水辺空間の形成が図られてきた。今回オープンカフェが実現したのはこのモデル地区のひとつ、納屋橋地区である。

### 賑わい復活をめざして

かつての納屋橋界隈は舟運や「広ぶら」（広小路通りの散歩）の人々で賑わう場所であったが、近年は名古屋駅と伏見・栄の狭間で次第に寂しくなりつつあった。この納屋橋地区を魅力ある街とし賑わいを復活させるため「大正モダン」をコンセプトに特徴ある親水空間の整備が進められてきた。

「堀川七橋」のひとつ納屋橋（昭和 56 年改築）は大正 2 年架橋の際の欄干をそのまま残し、当時のアーチのデザインも継承するなど、地域の歴史ある景観のコアとなっている（写真 3）。橋詰に建つ旧加藤商会ビル（昭和 6 年建築、登録有形文化財）は平成 15 年から修復が進められ、今年 1 月にタイレストランが開業、地階には地域に開かれたギャラリーもオープンした（写真 4）。

平成 13 年より納屋橋上下流約 400m に遊歩道（リバーウォーク）が整備され、本年

写真 3 大正 2 年当時の欄干を残した納屋橋



3月25日の「愛・地球博」開催に合わせ、一連区間が完成する運びとなった。

こうした整備が整うなか、占用の特例措置を活用しオープンカフェを設置しようという機運が急速に高まった。まず遊歩道

整備に合わせ川に面した 3 店舗が全面改築し、遊歩道側に出入り口を設けた（写真 5）。また対岸リバーウォークに面した市有地に、愛・地球博開催期間中「納屋橋環境劇場」として 5 店舗が運営されることになった（写真 6）。遊歩道にこれら店舗を拡張すれば水辺を一体として楽しむことが可能である。

関係者の尽力のもと、本年 1 月、広島、

写真 5 店舗を改築し水辺にオープンカフェ



写真 6 河岸の市有地を民間が活用



大阪に続く全国3番目の河川として国による特例措置の指定を受けた。続いて出店者選定のための利用調整協議会の開催、河川管理者である愛知県による占用許可などの手続きを経て、ついにこの3月19日、両岸合わせて8店舗のオープンカフェが開店できる運びとなった(写真7)。

都市の再生においては賑わいを面的に波及させることが重要だ。橋詰にあった雑居ビルの1つが、納屋橋周辺に賑わいが戻るとともに撤退、新たに遊歩道と連続したオープンスペースとして整備されることとなった。オープンカフェの取組みは確実に地域を変えている。

### 市民の力で堀川再生

こうした堀川再生を盛り上げてきたのは、市民の堀川に対する「熱い想い」と「行動力」に他ならない。

都市再生本部では平成15年度より「全国都市再生モデル調査」として、地域が自ら考え自ら行動する取組みを募集し、15年度

写真7 納屋橋環境劇場オープンカフェ



写真8 2,000人が参加した堀川調査隊



171件、16年度162件を選定し支援を行った。

15年度に実施した「名古屋堀川1,000人調査隊」(名古屋堀川ライオンズクラブ提案)は、幅広い募集で市民、企業、学校などが調査隊を結成し、導水の増量前後を市民の自由な視点で観察するという取組みである。予想の2倍、2,000人余りの市民が217隊を結成し、4ヶ月間思い思いの調査、実験を楽しんだ。調査や成果発表会、インターネットでの情報交換などを経て、堀川を通じた幅広いネットワークが生まれたことが次へのステップにも繋がる大きな成果となった(写真8)。

16年度には、「ゴンドラ利用による堀川の観光都市づくり」(クリーン堀川提案)が選定として、名古屋デザイン博当時に市に寄贈されたゴンドラが堀川で試験運行され、官民協働で堀川から都市観光と国際交流への道を探っている。

本場イタリアのゴンドリエーレによる市民への漕艇練習会などを経て、3月18日納屋橋栈橋において、オープンカフェの設置

写真9 ゴンドラ就航



写真10 ゴンドラでコンサートも



とともに試験運行が始まった。連休にかけ4日間で延べ200人の市民が水上ゴンドラを楽しみ、堀川の景観に新たな風を吹き込んだ(写真9、10)。地元では今後の運行に向けても期待が高まっている。

### おわりに

都市河川における河岸の活用という点で名古屋堀川はいまや全国の先頭を走る一員である。これは30年前の堀川の姿からは想像もできなかったことであろう。

もちろん河岸の整備や下水道事業という公的取組みに負うところは大きいですが、もともと地域の人々がそうした事業の必要性を喚起し、また自らの活動でハード整備の成果を自分たちのものとして活かしてきたからである。名古屋市職員の「堀川で活動する人たちあつての成果だ」という言葉が印象的である。

このような取組みが都市にもたらす効果は大きい。国としてはこうした地域の意欲を応援する手法を引き続き検討していかねばならないだろう。

内閣官房都市再生本部事務局  
〒100-0014 千代田区永田町1丁目11-39  
永田町合同庁舎3階  
Tel:03-5510-2151 Fax:03-3591-0022  
お問い合わせ先：三橋・鈴木

○本レポートは、都市再生本部ホームページにおいても掲載しています。(4月1日より)  
<http://www.kantei.go.jp/jp/toshi/>  
以下の都市再生レポートも掲載していますのでご覧ください。

No.1 魅かれ合うまちとアート ～「全国都市再生モデル調査」の結果から～

○次号以降の都市再生レポートの配信を希望される方は下記ホームページにて、必要事項を記入の上、送信してください。

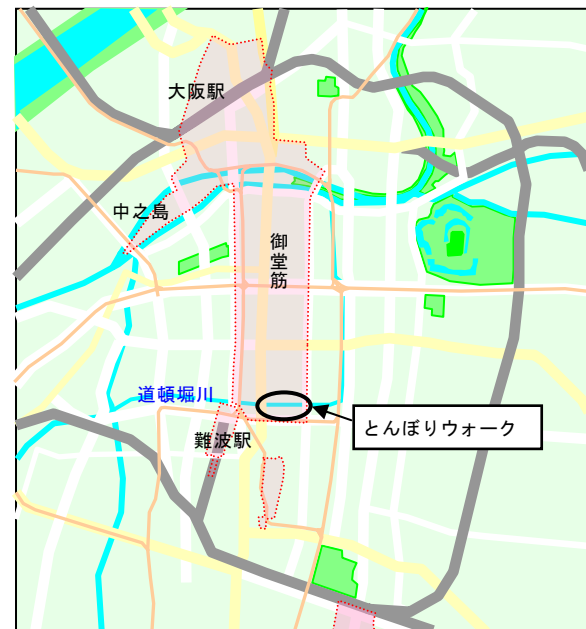
○また、都市再生レポートについて、幅広く皆様からのご意見をお待ちしています。

<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tosisaisei/goiken.html>

広島・京橋川



大阪・道頓堀川



名古屋・堀川

